

1. ネパール選挙監視参加の意義

もう10回を越えたらどうか、選挙監視は94年のあの悪夢のようなハイチ選挙を皮きりに主要な紛争地や地域の運命を決める選挙に立ち会ってきた。実は今回のネパール選挙には、それほどの関心があったわけではない。ANFREL(Asian Network for Free Elections)が最初に参加打診をしてきたときには、明確な回答をしなかった。日本での社会活動・政治活動があるので、だれもが行ける容易な選挙や、だれもが行きたがる風光明媚な場所での選挙はなるべく避けてきた。実はむしろ直前に行われたパキスタン選挙のほうに行きたかったのだが、

しかしながら、ネパール選挙を取り巻く状況変化、鉱物資源や水力発電資源をめぐる先取り合戦、そして何よりもネパール南部のタライ分離独立を主張するグループが登場するによって、初めてこのネパールが他民族国家でちょうどボスニア・ユーゴ・コソボという構図に酷似していることがわかった。

そこへチベットの騒擾。膨張を続けるアジアの超大国中国とインドとの中間域にあるネパールの選挙はまったく次元のことなる選挙となりつつある。行きたいではなく、「行かねばならぬ」選挙になってしまったのである。

この選挙は問題が何層かにわたって構造的に積み重なっているところにある。最も簡単なのは政治近代化への脱皮だが、王政が共和制、民主制になるといっても、つぎには「どのような？」という修飾語をつけるだけで問題の深度は急激に深まる。共産党、マオイストとの関係に加えて、マデシ民族問題、タライ平原の分離独立問題が急浮上した。

これはまさに膨張を続けるインド中国両大国というか両巨大文明の接点の問題とも関係がある。そこに地球温暖化対策としての水力発電やレアメタル争奪戦がからむと、チベット問題の縮図がネパールにも垣間見えるであろう。

2. バンコク（スワナプーム）空港に想う

選挙が4月10日なので、本来なら選挙監視団にとってきわめて重要なブリーフィングそして選挙直前に行われる政党のキャンペーン活動を見るために、すくなくとも4月の3日には日本を離れなければならなかったが、残念ながら日本での活動日程そして現実のフライトがとれないために4月5日発となってしまった。

ネパール行きにはいくつかルートがあるが、結局、一番便数の多いタイ航空でしかフライトがとれなかった。しかしまあ、成田空港について驚いたのは、搭乗手続きの厳しくなったこと。X線の荷物検査もパソコンなどいくつかのトレイに載せて分別チェック。ちょっと一年ぐらい海外に行かないだけで、何か

浦島太郎になった気分。バンコクでのトランジットはホテルに入らずに空港泊になるので、簡単な歯磨きセットを購入したのだが、これがまさに荷物検査でひっかかり、歯磨きペーストのチューブがだめという。まあ、理論的にはこれも液体に近いし、ある種の爆薬と似てないこともないが、「それなら売店で売るな」、とってしまう。それでも、要するに透明ビニールに入れてあればいいというので、書類入れに入れる。ポケットに入れておけば危険で、書類入れに入れておけば安全というもおかしな話だ。ようするに杓子定規、形式主義のチェックということだろう。

バンコクのスワナブーム空港もまた、グローバリズムの影響を受けて一翼が500mの放射性に展開した国際ハブ空港として大変革を遂げていた。24時間空港というものはこういうものだろうが、深夜になっても人も減らないし、売店も営業している。

経費節減でホテルにも泊まらずにベンチで夜を明かしたが、寒い。ほとんど眠れなかった。昔は空港で20時間ぐらいごろ寝して平気だったが、さすがによる年波には勝てないということか。やはり若い人はベンチのほかにも、コンクリートの床にそのまま寝ていた。元気なものだ。しかしさすがに11時間待機となると時間のつぶしようがない。有料ラウンジは目が飛び出るほど高くて、これを利用するなら最初からホテルに泊まるんだったなと思ってしまう

3. カトマンズ到着後から活動開始

翌4月6日、バンコクからは3時間で、あっというまにカトマンズ着。メキシコシティと同じように高地の盆地でもともと湖だったところから、空気が淀みやすく、空気が重い。ホテル到着後、小生が参加する汎アジア選挙監視NGOのANFREL (Asian Network for Free Elections) のホテル内事務室を訪問。主要メンバーは会議で出払っていたが、若い人が一杯で親切に対応してくれた。アジア各地の若者が国籍・文化・言語の壁を乗り越えて協働している絵は美しい。日本の若者がいないのが残念。唯一の日本人であるインターバンドの阿部さんは、すでに地方に配属されてカトマンズを離れている。

小生も本来、地方にそのまま向かう予定だったが、小生の到着が遅れたので、交代要員が出発した直後だった。小生個人としては、地方の現場できれば問題のあるタライ地方、やYCLが問題を起こしている地域に行きたかったが、ANFRELとしてはむしろシニアメンバーとして政党・団体・大使館などを回ってほしいということなので、急遽、カトマンズ活動に方針切り替え。

ちょうど、最大政党の国民会議派の幹部が来て、説明ミーティングに立ち会う。政治家はどの国も自己主張して元気だ。マオイストの攻撃とくにその傘下にあるYCL (青年共産主義リーグ) の暴力行為に対して国際NGOはより監視

を厳しくすべきとの意見がでた。

前日寝ていないので、このままベッドに直行したかったが、スタッフと一緒に「第三の目」といういかにもチベットらしい名前のレストランへ。しかしまあ、ともかく眠くて味も鈍く感じた。

4. コイララ首相との面談。

4月7日朝一で、コイララ首相表敬。カトマンズへの到着が遅れるかもしれないということで、小生の名前は表敬者リストになかったが、**Professor SUTO**が来たということで、**ANFREL**事務局も気合を入れて事前通告なしに強行突破することになった。小生が政界にでてNGOや選挙監視活動を離れて随分時間がたつので、事務局の中も知らない若者（といっても30台後半だが）ばかりだったが、勇猛果敢(?)な首藤の名は轟いているらしく(?)、敬意と期待の眼差しに、こちらは恥じ入るばかり。

首相公邸で待つことしばし、高齢で最近では病気がちである首相は国民会議派党首であり、まさに選挙前の超多忙な時期にもかかわらず朝の時間を割いてくれた。**ANFREL**のこれまでの活動実績が評価されたのだろう。

日本からも首藤が参加したとサユド・ケッポル会長が言うと、コイララ首相は自民党の故橋本総理との関係を懐かしがり、同氏が毎年ネパールに来て、トレッキングも楽しんでいて、今年は政府派遣団でご子息(自民党)がこられて嬉しいというような話をしていた。こちらは、「なるほどね、こうして利権も世代間を越えて受け継がれるのか……」と妙に感心した。



コイララ首相(中央白服)との面談

5. UML ネパール党首との会談.

ホテルに戻って朝昼飯と思っただが、最大野党の統一共産党 (UCP=ML)のネパール党首との会談が入り、食事はキャンセル。結局この日は朝から夕刻まで何も口にすることができなかった。ネパールの共産党は不思議な党で、統一共産党は一種のリベラル・大衆政党で、そのマニフェストなど見ると、福祉や女性の権利要求等まるで日本の民主党のような感じである。党のシンボルも鎌と星でなく、すべての人に恩恵をという太陽である。マルクス・レーニン主義を標榜する統一共産党から多数の分派があり、それぞれ共産党を名乗っている。もっとも有名なのは有名なマオイスト（毛沢東主義）で各地で激しく他党候補を攻撃し破壊活動も行っている。

党本部そして事務局長宅で会談を持ったが、迷彩服を着た武装警官が護衛している。他党のオートバイを連ねたラリーが建物の前を威嚇（？）デモンストレーション。長時間待たされたが、その理由がマオイスト党首のプラチャンダ氏との協議というのであればしょうがない。同じ共産党ということで激しい摩擦があるようだが、ようやく選挙直前で暴力排除の合意が成立したようだ。それでもマオイストの影響下というか指揮下にある若い世代の別働グループ YCL の暴力的な妨害には悩まされているようだ。



CPN-UML(統一共産党マルクスレーニン派) ネパール党首

待合室で日本からの総理府派遣団長の表敬とぶつかり、挨拶をしておいた。

大使館員などには顔をあわせたくないが、結局、名詞の交換。

そのあと国連の人道関係部署である OHCHR 表敬・情報交換。各地でのマオイストとの衝突に神経をとがらせている。

6. マデシ・グループと意見交換

ホテルに戻って、今度はなんと問題のマデシ・グループ有志との会談。直接話し聞き、きわどい質問をなげかけて、ようやく問題の本質の端緒がわかった気がする。

彼らが言下に否定するのは分離独立の動きであるが、全人口の半数に近い集団であり、しかも歴史的に極端な差別状態に置かれてきた彼らが政治に目覚めたとすると、分離独立の要求はこれからもくすぶり続けるであろう。彼らの統一的な主張、要求は要するにマデシが実権を握る州を作れということだろうが、それはきわめて難しい要求と思う。

最後はアジア財団、NDI,BC などのドナーグループとネパール料理で会談。こういう場にどうして日本のドナーが参加しないのだろうか？役に立たない政府派遣団などの代わりに、アジアの NGO に資金援助したほうがよほど外交的効果があると思う。

7. おそろべし日本人中年登山隊

今回は ANFREL が本部を置いているラディソンという比較的高級な老舗ホテルに滞在したのだが、宿泊客の 10% ぐらいは日本人の中年トレッキング団ではないかと思う。連日、白髪の中高年の一団がロビーからトレッキングに出発。その存在感は大きく、ほかの人はどう見ているのだろうか？日本の豊かさを表現しているのか、あるいは中高年は定年後はいまや旅行しかしていないのか？... なんて思ってしまうより、ひがんでいるのかな？日本では報道されていないのだが、CNN や BBC を見ればカトマンズや周辺での爆破テロが連続して起こっているのに、なんでこんなときに高齢者がたくさん来るのかと、ホテル側は驚きながら、それでも客がようやく確保できて喜んでいるのだろう。

ところで、ホテルで驚かされるのはインターネット環境で、全室がワイアレスでアクセスできる。古びた調度品の部屋がワイアレス環境になっているのに驚かされる。日本の PC 環境はどんどん遅れていっていると思う。新しがりやの小生も最初はワイアレスでやっていたが、結局日本では不便で、結局接続コードを持ち歩いている。PC 自体が安価なものは対応していないと思う。こんなところからも日本が国際社会の歩みからずると後退していることがわかる。いやはや、カトマンズで教えられるとはね。。

8. 政党キャンペーン最終日(4月8日)

政治キャンペーンはお国柄が出て面白いといっっては失礼か... 福祉がうりもの政党(統一共産党)の「歌い踊る選挙キャンペーン」を見学に行ったが、前市長が演説すると思ったら、次にラップダンス、ネパールの伝統ダンスなどが続く。次に黒目がねをかけ、杖をついた盲目の参加者が、手を引かれて登場、OO党を支持したら、目が見えるようになった!と叫んだのにはびっくりした。それでも、みんな何が起こるかわかっているようなので、結構一般化しているプロモーションの定番かもしれない。



(CPN-UMLの歌って踊ってキャンペーン、太陽がシンボルマーク)

各党のプロモーションを見学したいが、予定が立て込んでいて、全く自由が利かなくなった。

街中で驚かされるのは、意外とマオイストの評判が良いこと。これまでマオイストは破壊行為・暴力行為で人心が離れていると聞いていたが、むしろ若い人には親近感がある感じ。通訳の大学生に聞くと、女性に人気が高いのは、封建伝統や因習からの脱却や女性差別にマオイストが反対しているせいだという。

9. 法律専門学校生との意見交換

カトマンズ・ロースクールで選挙をめぐるパネルディスカッションのあと学生と懇談。議論の中で、学校側の教授が今回の選挙に法律を専攻する学生が監視団として参加することの意義を述べた後、ちょっと口が滑ったのか、「後援者は

反対だが... 押し切って実施する...」みたいな話をして、こちら (ANFREL) サイドは顔を見合わせた。しかしまあ、そうだろうな、高い授業料を払っている虎の子の上流階級子女は親にしてみれば一流の弁護士になって高い給料をもらうのが目的で、正義とかネパールの将来のために危険な地域に行かせてほしくないというのが本音だろうな。写真のように見るからに両家の子女という感じ。しかしまあ、小生もリラックスしているというか、学生と話しているとすっかり教授顔になってしまっているね。



(カトマンズ・ロースクールの若き法曹界の卵とともに)

午後からはネパール人の選挙監視 NGO (NEMA) そしてアメリカの民主党系シンクタンクの NDI と意見交換。アメリカ側はマオイストをテロリストと同一視していることがよくわかる。平和交渉の結果、ネパール国軍とマオイスト人民軍はそれぞれ兵営に籠って、出てこないのだが、マオイストの暴動やマオイスト人民軍と国軍の武力衝突の可能性について言及していた。そんな情報はどこから来たのかと聞いたら、結局、国務省と CIA ということで多少しらけた。しかし、こちらの表情を瞬間的に読み取ったのか (この辺がプロだな)、すぐさま、アメリカでは政府は国民に被害が生じさせるかもしれない団体のことを調

べて、国民に通知する義務がある.. みたいな弁明をしていた。しかしまあ、地域の情報と知識の広さ深さに感銘を受けた。このへんが西洋社会の強みで、知性と根性と体力とを兼ね備えたつわものがごろごろ現場にいるかんじ。日本はとてまかなわない。もう少し学者研究者も現場にでて、しかも現実社会を動かしてみないといけない。実践しないと入ってこない情報こそが貴重なのだから。

10. 前日の冷却日

選挙の前日は **cooling day** と称して、政党のキャンペーンなどが禁止され、過熱した選挙活動の冷却日となっている。逆にこのときに世界各国の要人などが入ってきて、各選挙監視グループが記者会見や情報交換会を開催し、スケジュールがバッティングして大忙しで市内を飛び跳ねることになる。

ANFRELのチェアマンがカーターセンターを主催するカーター元アメリカ大統領とのアポイントで出かけてしまい、今回ネパール選挙の影の協力者であるインド大使館には、小生がANFRELを代表していくことになった。インド大使ともかなり高度な意見交換を行ったが、その情報力、判断力には圧倒されるものがある。隣国だから当然だろうが、良く聞くと、大使は官僚外交官でなく、政治家の経験もあるらしい。どうりでね、なんともいえぬ存在感があった。



(インド大使、左から3人目とともに)

大使の主張は欧米のシンクタンクなどとはまったくことなり、今回の選挙は多少の妨害や暴力行為はあっても、全体的には自由公正選挙と認定されるような選挙になると断言していた。最大の勢力拡大はマオイストで、広範な支持に加えて、一部では他党候補者や有権者への嫌がらせ、さらにはキャスティングボードを握ることになる無所属や小政党候補者との取引などによって大幅に議席を伸ばす可能性を指摘していた。

また国際社会の関心事であるタライの分離独立やチベット難民問題に関しては、タライの主要民族であるマデシに対する積年の差別や問題点を指摘しつつも、マデシが分離独立に動くことはないと主張したが、チベット問題では逆に中国に気を使ってか、一つの中国論支持の公式見解しかコメントしなかった。

夕刻に **Peace Conflict Management Committee** (平和と紛争管理委員会) なる組織との会合。出来たばかりの政府組織だが、選挙よりも選挙後の平和交渉 (**Peace Process**) やネパールにおける潜在的リスク (マオイスト人民軍と国軍の統合、紛争解決、マデシ問題、タライ問題、分離独立問題など) をとりあつかう部署として新設された。その目論見はまさに正鵠を得たものだと思う。参加者はこれまで会ってきたネパールの政治問題専門家や **IFES** のようなアメリカの選挙シンクタンク、紛争管理、危機管理問題の専門家まで多様だが、みなそれぞれ専門家という感じ。ネパール側の主催者の思いつめたような表情から選挙後の紛争の可能性を読み取る。

11. 4月10日選挙始まる

ネパール選挙が始まった。6時にホテルを発ち、投票所の開所に立ち会う。選挙当日にカトマンズに残ったのは、第10選挙区すなわちマオイストの橋頭堡の選挙区で何が起こるかを監視するのが主たる目的であった。

過去に何度か選挙を経験しているカトマンズでは混乱もなく、投票開始前から人々が列を作り始めた。選挙人名簿との照合などをすませ、投票ブース内で、政党のシンボルが印刷された表に、卍印のスタンプを押す。卍はここでは幸福のシンボルだが、欧米の監視員はなんでスワスチカ (ナチスのシンボルであった) を押すのだと不快がった。



(マオイストのシンボル：鎚と鎌で飾られた選挙区の風景)

各地の投票所での暴力、あるいはカトマンズなど都市部でのマオイストの蜂起や爆破テロなど、いろいろわきがあったが、いずれも順調に開所。多くの住民が朝からつめかけていて、関心の高さが表現される。投票手続き、ネパール人による国内監視団の監視など、きちんと選挙事務体制ができていると思う。投票所の前に各政党がデスクを持ち出し、投票に来たひとに投票登録者名のチェックを行っていたが、彼ら流にいうと、自分の名前がないなどの混乱があるので、政党の自主サービスということ(?)。マオイストのデスクには比較的ファッション性の高い服を着た若者が事務を行っていて、マオイスト＝貧農という古典的図式は当てはまらない。

カトマンズ地区の投票所ではインド政府提供の電子式投票機器が使われていた。若い人は別に困らないようだが、高齢者は選挙ブースに入ってから、ボタン操作に逡巡するらしく、かなりの時間を要していた。



(マオイストのデスク 1、指輪をしている)



(マオイストのデスク 2)

度重なる暴力で、西洋社会からはまるでテロリストのように蛇蝎視されている彼らだが、むしろ現代政党としての意味があるのではないか、むしろ因習や規制政党から離れた新しい政治集団というイメージもある。

マオイストが暴動を起こすかもしれないという第10区も、他の選挙区と比較して、マオイストの広告チラシなどは確かに多く残っていたが、現実には実に秩序だった平和な選挙だった。

選挙監視は少数の投票所を定点監視するグループとモバイルといわれる各党票所を移動しながら監視するチームに分かれるが、小生は後者に参加。途中さらに、パキスタンの平和構築研究者でカトマンズで教えてもいるアリ、ANFREL ミッションの事務責任者でもあるインドネシアのイチャルと一緒に別働チームを作って問題の発生した投票所に直行して解決に当たることにした。これにインド在住のフィナンシャルタイムズ紙中国系アメリカ人記者が加わった。

やはりいくつかの投票所で、そこにYCLグループの結集が見られ、我々もインタビューの形式をとりながら、自制を求め行動を牽制する対応をとった。途中、本来選挙監視に直接参加しないはずの国連関係者が選挙監視のジャケットを着ていたの、クレームをつけた。また、ある郊外の農村部では、マオイストの政党ブースもなく、政党関係者は自分がどの党に所属しているかも明かさず、無所属を主張するものもいた。さらに選挙を明らかに村長などの村の顔役が取り仕切っている雰囲気があった。おそらくこの村全体がある党の支配下にあるのだと解した。



(農業地域での投票、女性が伝統的衣装を着、男女別の行列)

選挙監視で市内に戻ってきたが、観光地でもあるダンバール広場の投票所も見ようと進んでいるうちに、イアン・マーチン国連特別代表とばったり。懐かしい！こちらもおーおーと奇声をあげてとびだした。東チモール以来だなあという、向こうも懐かしがって、ツーショット。どことなくリラックスしている雰囲気、今回の選挙の成功が読み取れる。



(イアン・マーチン国連特別代表、東チモール以来だ。懐かしいなあ！)



車で走り回っている間に、つぎつぎと関係者と通り過ぎる。路上の売店で水を買っているスリランカ大使と遭遇。アジアの大使は本当によく現場を走り回っている。インド大使とも行き違う。最大の関係者だろう。こんな人が最前線を走り回っているのだから、影響力を行使できるのも当然だろうな。日本の大使はどこにいるのだろうか、やはり政府派遣団の自民党議員のガイドをしているのだろうか？



(スリランカ大使：中央とともに)

5時の投票終了時間がせまってきた。もう誰も投票に来ない。閑散とした開票所では係員がみな握手と拍手。いつもながら心温まる風景だ。投票箱を護衛する警官も登場。投票所の外は、投票の成功を分かち合いたいのか、群集がとりまいている。今日一日、走りに走り回ったインドネシアとパキスタンの同僚と投票の成功を確信した。



(ダンバール広場の投票場で投票終了を迎える)

4月10日の選挙当日はホテル帰還が遅れる投票箱移動も監視するチームもあり、さすがにみな疲れきって声もなく、ばらばらに夕食を流し込んで解散、就寝へ。

12. 4月11日 投票翌日

しかし一夜明けるともう、つぎからつぎへと地方から戻ってくるチームを待ち受けて報告と監視評価。カトマンズチームは朝一で最初だが、何かみな疲れ果てて元気がない。しかし、若い人はさすがに現場写真を組み込んだ報告をパワーポイントで仕上げている。おそらく寝ずに作ったのだろうが、さすがにいい顔をしている。



(投票翌朝の報告とデブリーフィング)

カトマンズチームは朝一で最初だが、何かみな疲れ果てて元気がない。しかし、若い人はさすがに現場写真を組み込んだ報告をパワーポイントで仕上げている。おそらく寝ずに作ったのだろうが、さすがらしい顔をしている。

しかし、あまりにも平和な選挙であったために、これまでの危険地帯での選挙に比べると監視の報告も力が入らない感じがする...

今回の選挙はきわめて平和平穏に行われ、「マオイストが一斉蜂起して国軍と打ち合いになり選挙はながれる...」みたいなことを言っていた西側「専門家」はいまごろこまっているだろう。状況的にはまさにインド大使が予想した展開どおりに思える。これからは選挙よりも選挙後の平和交渉や国軍と人民軍の融和などが問題となろう。5日後には最初の開票発表が行われると聞く。おそらく新たなパワーシェアリングをめぐる、もう各党が動き出しているのだろう。

しかしどうにもこうにも眠いね.....

13. マオイストの伸張

今日(4月12日)は朝からマオイスト票の予想外の拡大が現地新聞などメディアの中心テーマとなっている。

各地から帰還した監視員の報告に基づいてANFRELとしての公開報告。大きなホテルの会場がいっぱいになった。日本政府派遣団の団長も来たので挨拶、

意見交換。そのときやはりマオイストの躍進をどうして見誤ったかが話題となった。欧米の分析や主張どおりにマオイスト＝テロリストというように薄っぺらに理解することの危険を痛感したのだろう。報告会では ANFREL もいつもは多くの混乱や暴力で選挙が「自由公正」であるかどうかの判断がいつも議論になるのだが、今回はあまりにも見事に平和で安全な選挙だったために、組織内でも異論がなく、また今回の公開報告でもあまり質疑も多くなくて、早く終了。



(ANFREL の記者会見)

14. プラチャンダ党首とバッターライ副党首

ところが終了して集合写真をとっているときに、事務局から耳打ちされ、マオイストのプラチャンダ党首が ANFREL と会うという。急遽、会合会場のホテルに向かったが、どこで情報を得たのかつぎつぎとターバン姿（＝インド人）の人が会場に終結し始めた。小生も最前列に席を確保してビデオを回す。登場したプラチャンダを人々が拍手で迎える。



(右がプラチャンダ党首、左が No.2 のバッタライ氏)

司会は、なんと！マオイスト理論の思想家であるゴルカを選挙基盤とするバッタライ副党首ではないか！！質疑になったらつぎつぎと質問と賞賛が交互にでて、質問のタイミングがとれなかったが、プラチャンダ本人が小生を見つけて指名してくれた。多分ターバンや民族衣装の中で、背広をきてネクタイをしめた日本人の希少価値を認めてくれたのだろう。マオイストとはアジアに残る封建制度からの脱却を目指すとか、女性の参加による革新など、気合が入った演説はオーラが漂っていた。ビデオを見返しつくづくそう思う。マオイスト勢力の大躍進の背景には、女性票の貢献も大きい。その意味でも、いわゆるマオイストが、毛沢東思想というより、現代アジアの問題をしっかりと把握した新政治思想であるとも思った。インドの活動家から、「あなたの責任はより重い。ネパールだけでなくアジア全体にこの新しい政治思想そして活動を広める責任がある」という意見に大きな拍手が会場に満ちた。

ホテルに帰り、ANFREL の人事、今後の戦略などをボードメンバーを協議、小生をボードの推薦する声があがり、固辞したが、結局多くの友人に説得されて引き受けることになった。これで、今回のミッションのすべてを終えた。実に内容の濃い、成果に満ちたミッションだった。

新聞は引き続きマオイストの雪崩的な勝利を報道している。逆にこれまでネパールのリベラル勢力を代表していた統一共産党 UML は大敗したようだ。結局、保守派の国民会議と急進派のマオイストの間に陥没したのだろう。

しかし、ともかく UML が反発せずにマオイストと連帯すると、ネパールは

実に、王政から共産党支配に変わる。これほどドラマチックな変容もなかなか見られないものだろう。共産党とかマオイストとか言っても、そのマニフェストを見ると要するに社会民主主義というか、リベラル勢力というか、そういう政治クラスターだと思う。まあ、いずれにせよ、これからの課題は新憲法と軍隊の統合だろう。小生もネパールとの関係はこれから長く深くなりそうだ。

13日はANFREL総会だが、小生は残念ながらフライトの都合で、これから空港へ。ANFRELも10周年だそうだ。これからいよいよアジアの真の民主化が重要になってくるから、ANFRELの活躍するシーンも多くなるのだと確信した。